HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	張載關學思想探微 : 宋明理學における「虚」の思想の研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	山際, 明利
Citation	北海道大学. 博士(文学) 乙第7171号
Issue Date	2022-12-26
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/87747
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Akitoshi_Yamagiwa_abstract.pdf (論文内容の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　山　際　明　利

学位論文題名

張載關學思想探微　－ 宋明理學における「虚」の思想の研究 －

・本論文の観点と方法

本論文は、北宋の儒者、張載（1020～1077）とその思想に關する總合的研究である。

張載は、周敦頤、程顥、程頤とならぶ北宋四子、またこれに邵雍を加えた北宋五子の一人として朱熹の尊崇を受け、その學は、朱子學の先蹤として夙に知られる。しかしながら、張載の學説は、從來、朱子學に吸収されたという評價を得るものの、その説をすべて肯定的に攝取したとはいい難く、その狀況を整理、明確にする必要がある。また、明代以降、朱子學が官學化し、王學が盛行する中で、張載の學を批判する儒者が出た一方で、反對に張載の後繼を自任する儒者が出現した理由についての研究も、必ずしも十分とはいえない。さらに、二十世紀後半、氣を重視する唯物主義思想が最も進歩的と見做され、あわせて張載の氣論が高く評價されたが、果して張載を氣の思想家と呼稱してよいか、さらなる檢討が求められる。

本論文は、こうした問題意識を前提としつつ、張載の代表的著作『正蒙』を中心に、その著述全體への精緻な讀解と詳細な考察を通して、張載の思想の特色、獨自性を明らかにするとともに、その歴史的意義の再定義を試みたものといえる。

・本論文の内容

第一部では、張載の人物像を明らかにすべく、生涯と業績について考究する。張載が政府權力中央に接近する機會を得ながらも短期間で離職した經緯を辿ることによって、その思想が權力中樞の求めるところではなく、純眞な思想であることを明らかにし、本論文における張載思想探索の立脚點を得る。

第二部では、張載の思想内容について論述する。前半第一章では思想全體に關する概括的な考察を行い、後半第二章では特定のトピックを定めてそれに關する張載の見解を探究する。

第一章第一節では、張載思想の核心ともいうべき太虚卽氣論に關する檢討を行う。張載は存在の生滅を氣と虚との循環で捉えた上で、存在の本質を虚と見做し、存在が虚と有形の物と兩様のあり方を循環的にとると考える。かくして張載の氣論が循環思想の特色を有すること、張載が存在の様態を虚と有形との渾一において捉えたことを論證する。

第一章第二節では「天地」「氣質」の性説に關して考察する。張載の性説は、性に二重性を見るのではなく、一つの性に兩面の性格があると把握すべきこと、そのことは太虚卽氣論に見られるのと同様であり、ことの兩面を渾一的に把握するという張載の思惟の特色が現れたことを指摘する。

第二章第一節では『論語』における「縱心」「絶四」に關する章への張載の解釋を手がかりとして、聖人に關する觀念、死生に關する觀念について檢討する。

第二章第二節では、同じく『論語』の「屢空」に對する歴代の解釋に著目し、「空空如」に對する張載の見解を援用することによって、張載の心性説が虚を重視することを確認した上で、それが呂大臨の「空」の説へと繼承されたことを證明する。

第二章第三節では「大學」の「格物」に關する解釋を縱覽した上で、張載に獨特の格物説が存在

し、その説は、後代、王守仁の格物説に影響を與えた可能性があることを指摘する。

第二章第四節では、張載の禮思想に關する檢討を行い、その思想が理念においては高邁で人を感奮させるものの、實踐性、特に統治思想としての實效性という點では疑わざるを得ないことを解明する。

第三部では、張載および門弟の學である關學が宋明理學思想に與へた影響について考究する。

第三部第一章では、宋代道學における「氣」の意味合いについて檢討する。張載にあつて氣は外形と内面との兩方で重要な意味を有するものであり、その氣論は朱熹にも受け繼がれたこと、他方、朱熹以外の道學諸儒においては内面の氣が重視され、外形の氣が論議の對象とはならない傾向があったことを論證する。

第三部第二章では『孟子』に見られる「赤子之心」への解釋の變遷を通じて、宋明儒學思想に占める關學の位置について考察する。その上で、洛學の修養論は、朱子學に繼承され、關學の方法論は、思想史の主流とはならないものの、特に呂大臨における心の本來態を赤子という實體に見る見解は、朱熹に強く影響を與え、朱子學成立の契機となったことを論述する。

第三部第三章では、大鹽平八郎の太虛說を手がかりとし、張載の思想が王學に及ぼした影響に關して考究する。王守仁が太虛の語を使用するときは譬喩として用いるが、反面、良知説の内容について調査すると、太虛という語彙は用いないものの、思考の展開は張載の太虛説からの影響が認められることを指摘する。

第三部第四章では「西銘」末尾の「存順沒寧」に對する朱熹の解釋の變化を考察する。學説定立期の朱熹は「存順沒寧」を理念的に把握したが、後年、學者の實體に卽した方向へ解釋を變更した。こうした動きは、明儒における理氣一元化の契機となったに相違ないが、その胚胎となったのは、關學とりわけ呂大臨の思想であることを解明する。